

持続可能な インパクトを生み出そう

CREATE
LASTING
IMPACT

Rotary

2026-27年度
国際ロータリー会長
オンラインカ・ハキーム・ババロラ

第2730地区 鹿児島西ロータリークラブ

会長 中馬 輝彦
幹事 水流 源彦
会報雑誌委員長 東 和宏

10月は地域社会の経済発展月間です

会報雑誌委員長 東 和宏

例会場 〒892-0828 鹿児島市金生町3-1 山形屋7F 社交室 毎週水曜日 12:30~13:30
事務所 〒892-0828 鹿児島市金生町3-13-5F TEL: 099-223-5902 FAX: 099-223-7507本日の
プログラムの
主要

勝つ組織をつくるリーダーの力・原貢監督から
学んだ「意識・言葉・継続」 長田 浩幸 会員
「テニスと人との出会い」 寿福 博文 会員

- ① 四つのテスト唱和 ② ロータリーソング（それでこそロータリー）
③ 会長あいさつ ④ 会務報告 ⑤ 出席報告 ⑥ ニコニコBOX披露

「柵からひとつかみ② ～岡潔／森田真生さん～」

会長 中馬 輝彦

2年ほど前に、なんとなく本屋さんで出会った本。「数学する人生 岡潔／森田真生編(新潮文庫)」についてお話しさせていただきます。この本の興味深いところは、二つあります。

ひとつは、岡潔さん(明治34／1901～昭和53／1978年)という、日本数学史上最大の数学者について。多変数解析関数論において世界中の数学者が挫折したといわれる「三つの大問題」をひとりですべて解決した岡氏の生き方や考え方を写真付きで、分かりやすく詳細にいまに伝えている点です。ふたつめは、これを編集された森田真生さんは、昭和60(1985)年生まれで、35歳の時に同著初版(平成31／2019年)を発行。彼は、数学科卒の数学研究者であると同時に小林秀雄賞を最年少の31歳で受賞。比較的若い森田氏が、同じ分野の研究者の先人の生き方・考え方について、同著の巻頭「序 いま、岡潔を読むということ」にある様に、その心の部分、思想の部分がいかに関心をもち、大切に伝えていこうとしているところ。その序の最後の一文は、「生き生きとした岡潔の言葉の世界を、全身で思う存分味わってみたい。」とあります。

岡氏の言葉に「私は芭蕉によって、典型的な日本人とはどういう人なのか、ほぼわかった。そして私もそういう人だという一応の自覚を得た」とある様に、芭蕉の句、芭蕉一門の句が、同著にはたくさん出て参ります。人の心は、二つの要素からなっていて、ひとつは懐かしさ。もうひとつは喜び。この二つを同時に感じるのが心なのだそうです。赤ん坊や幼児は自分で幸福を意識しているわけではなくて、喜びとは知的に分かっているわけでもない。ただ何となく幸福。余計なことを言わなくても、赤ん坊は

情で「生きることの喜び」をわかっている。幸福とはこういうものです、とあります。

岡潔氏は、世界において局所的に定義され止まっていた関数とその性質を、視点を変え、より大きな領域・大道へ拓き、数学また物理の分野において新たな世界へ人類を導いた方だそうです。1929～32(昭和4～7)年のフランス留学中「解析学の大道は、その行き手を、高く険しい山脈によってさえぎられている」という時代に、「十中八、九は解けないだろうが、一、二解けないとは言い切れない節がある」と思い、よしやってやろうと思ったたえとして。「高い山から谷底見れば瓜や茄子の花盛り」という、なんともどかな日本の祝い唄を引用されており、「私は結局ここをやり抜くのであるが、この呑みでかかるという一手以外何も使わなかったのである。日本民族30万年の歴史はいたずらに古いのではなく、いわば心の中に高々たる山がある様なものだから、本当に真剣になればきっとここを登ってみるし、そうすればどんなものでもこう見えてしまうのである」とあります。同著を読んでおきますと、ロータリーの学びにとっても近いものを感じます。その説明は無理だなあと感じつつも紹介せずにはいられませんでした(笑)。まとまりませんし、まとめません。

本日は、長田浩幸会員と寿福博文会員の卓話です。とても楽しみに参りました。

『自他を越えて「通い合う心」の中にこそ生きる喜びがある』との岡潔氏の言葉の通り、本日の例会も会員皆様と共に、そのような時間にしたいと存じます。有難うございます。

